

資本主義の進歩的・革命的作用

マルクスは、資本主義の進歩的、革命的な作用をつぎの点に見いだした。資本主義は、労働を社会化すると同時に、過程そのものの機構によって「労働者階級を訓練し、団結させ、組織する」、すなわち、闘争に訓練し、彼らの「反抗」を組織し、また「収奪者の収奪」のため、政治権力の奪取のため、生産手段を「少数の横領者」の手から取りあげて全社会の手にうつすために、労働者を団結させる。(『資本論』、650 ページ)〔第 1 巻、第 24 章、802~803 ページ〕

これがマルクスの定式である。

「工場労働者の数」のことはもちろん、問題になっていない。ここに述べられているのは、生産手段の集中と労働の社会化とである。……

彼（ニコライ——オン氏）は、『ルースコエ・ボガートストヴォ』第六号の彼の論文の二ページめで、資本主義による労働の社会化を正確に特徴づけ、この社会化の二つの標識、すなわち、(一) 全社会のための労働、(二) 共同の労働の成果を獲得するための個々の働き手の統合を正しく指摘しているからである。しかし、もしそうだとすれば、資本主義の「使命」は、一般に資本主義および労働の社会化の発展によって、プロレタリアート一般の創出によって遂行されるのであり、このプロレタリアートにたいして工場労働者は、先進部隊、前衛の役割しか演じないのに、なぜ、この「使命」を工場労働者の数によって判断したのか？ もちろん、プロレタリアートの革命運動が工場労働者の数にも、彼らの集積にも、彼らの発達程度、等々にも依存するということには、議論の余地がない。だが、すべてこれらのことは、資本主義の「統合的役割」を工場労働者の数に帰着させる権利をいささかもあたえるものではない。それに帰着させることは、マルクスの思想を途方もなくせばめることを意味する。

第一巻「人民の友」とはなにか P323~331

コメント

ここでレーニンは、ニコライ——オン氏のロシアの「工場労働者の数」が人口の増加数に立ち遅れている（ただし、事実は検証されていない）ことをもって、ロシアの「資本主義はその『歴史的使命』を遂行していない」、ロシアには資本主義以外の別の道がありうる、それを正しく提示すれば望みどおりのロシアが作れるという考えに対し、変革の力としての、工場労働者を含めた労働者の歴史的使命、社会変革の主体としてのプロレタリアートを作り出す資本主義の進歩的・革命的な作用、労働者を団結させる資本主義の「統合的役割」について述べている。

私たちは、日本の現実の詳細な研究にもとづき、労働者階級の歴史的使命、社会変革の主体としてのプロレタリアート役割を労働者の頭脳の中に意識化させるための宣伝・煽動を精力的に行わなければならない。

これが、私たち（共産主義者）の実践活動の中身である。